

- 1 駅のホームを離れて車外が暗くなると、地下鉄の窓は鏡になる。
- 2 普段は人込みのなかで意識もしないが、多くの企業で仕事納めとなり、▼  
通勤客の少ないこの時期は 窓の鏡としばしば対面する。
- 3 いくらかは気取って前に立つ洗面所の鏡とは違って、無防備な姿を狙われるせいか、▼  
いつもこんなに不機嫌そうな顔で街を歩いていたのだ、と驚くことがある。
- 4 老けたなあと、吐息がもれることもある。
- 5 鏡はうぬぼれの醸造器であり、自慢の消毒器でもあり、▼  
夏目漱石の小説で猫が語っていた。
- 6 窓の鏡を見るたび、▼  
自慢の芽が金輪際生じないよう 完膚なきまでに滅菌消毒されたような気分になり、▼  
年の瀬の地下鉄は妙にほろにがい。
- 7 日本に地下鉄が生まれたのも いまごろの季節である。
- 8 東京の浅草一上野間が開通したのは 1927年12月30日、▼  
きょうで80年になる。
- 9 初日は約10万人が競って乗車したという。
- 10 大都市のシンボルに初めて触れた人々の、▼  
心の弾みを数字が伝えている。
- 11 いまではもう、なくてはならぬ便利な足だが、心の弾みからは遠くなった。
- 12 蒸気機関車や路面電車に乗るのを楽しみに、都会から地方に出かける時代である。
- 13 こう見えて、おれも昔はちょっと騒がれたのよ……と、地下鉄はおのが姿を車窓に映し、▼  
若き日の追憶に浸っているかも知れない。